

2026\_0205 「記録的少雪の赤浅間」日々の理科 4197 号

お茶の水女子大学 サイエンス&エデュケーション研究所 田中 千尋

今朝の浅間山です。冬の澄んだ空気の中、山頂付近だけが朝日に照らされ、やわらかな紅色に染まっています。朝焼けの富士山を「赤富士」と呼ぶように、この光景はまさに「赤浅間」と言いたくなる瞬間です。冷たい大地の上に、山だけがほのかに燃えているように見え、北軽井沢の冬の朝の静けさを象徴しています。

例年であれば、今の時期の浅間山は雪で真っ白になり、山肌はほとんど見えません。しかし今年は立春の名の通り、雪の量が少なく、黒い火山の斜面が広く露出しています。その姿は、まるで四月中旬の浅間山を思わせるほどです。

浅間山だけでなく、山麓の北軽井沢でも雪らしい雪がほとんど降らず、地面が見えたまま冬が進んできました。積雪が残っている場所は限られ、地域全体として「記録的な少雪」と言える状況です。

この少雪で困るのは猛禽類です。たとえばフクロウは、雪の上を走るネズミ類を見つけやすく、捕獲も容易になります。しかし雪がないと、獲物は枯草や地面の色に紛れ、保護色となって捕獲数が減ることがあります。これはキツネなども同じで、冬の食糧事情に影響が出る可能性があります。

今週末は雪になりそうです。どの程度積もるのか、そして浅間山と山麓の冬景色が本来の姿を取り戻すのか、よく観察していきたいところです。

(2026年2月上旬／北軽井沢／東京から遠隔観測)

